

がん CT 画像読影のひきだし

稲葉 吉隆, 女屋 博昭, 清水 淳市, 前田 章光 編

＜書評者＞ 松尾 宏一

(福岡大薬学部教授・臨床薬学/福岡大学病院薬剤部)

がん医療の現場では、多種職・多診療科によるカンサナーボードなどのカンファレンスが広く行われ、薬剤師や看護師などの医療チームのメンバーが、これまで以上に CT 画像を見る機会が増えている。しかしながらメディカルスタッフが読影に関する教育を受ける機会は乏しく、放射線科医が普段から「どのように捉え」、「何を予測しながら」読影しているか知することは難しい。

本書のポイントは「序」にあるように、到達目標を「自力で CT 読影ができる」という高いレベルに置くのではなく、若手のメディカルスタッフが「症例報告会における医師の議論やカルテの記載内容を理解し、患者さんの病態をより深く理解できるようになる」という、取り組みやすかつ実践的なレベルに設定したことだ。そのため、全編において難解な理論については深く立ち入らずにシンプルな内容に徹し、CT 画像に詳しくない読者でもスムーズに内容を

理解できる、とはいえ、初学者が学習すべきことはしっかり押さえられており、その結果、本書のターゲットであるがん医療に携わるメディカルスタッフにとって非常に理解しやすい入門書となっている。

本書は「章」に相当する計 7 段の「ひきだし」で構成され、1 段目の「総論」に続いて 2 段目では「正常画像」について書かれている。われわれは普段から疾患を抱える患者の画像（異常像）ばかり見ているので「正常画像と異常像はどのような違いがあり、その二つをどのように比較するのか」という当たり前の視点や考え方を忘れがちなのかもしれない。以前、ある著名な腫瘍内科の医師が、「研修医は患者の（所見や検査値の）悪い点ばかりを探しがちで正常な点を見ようとしなない。『(悪い点ばかりの指摘なのに) この患者は生きているのですか』と意地悪く問いたい気持ちになる」とおっしゃっていたことがある。そうい

う意味で、「まずは正常画像を先に学ぶ」という考え方を本書では目次上で体现しているのは実践的であるし、好感が持てる。また 5 段目では「臓器別」に、6 段目では「臨床課題別」にがん CT 画像読影のポイントをさまざまなケースを通して詳しく丁寧に解説している。本書に記載されているようなケースに関する知識が備われば、多くの症例で放射線科医がどのように状態を捉え、何を予測しているかを推察するには十分であろう。

がん患者の CT 画像から患者の病態をより深く理解するために、ぜひ本書を多くの方に読んでいただき、本書で身につけた「ひきだしの中身」を活用して、がん CT 画像に日々接する医療チームの一員として活躍してほしい。

● B5 頁 240 2022 年 3 月

定価: 4,950 円

(本体 4,500 円 + 税 10%)

[ISBN978-4-260-04928-3]

医学書院刊